

ULTRA FACTORY presents

## ULTRA AWARD 2010

The Unprecedented Competition For The Students/Graduates from Kyoto University of Art and Design

Artists:

Genki Isayama

Taro Komiya

Eugene Kangawa

toki kake

Yukako Hashimoto

# ULTRA AWARD 2010

ULTRA FACTORY

ULTRA FACTORY

<http://ultrafactory.jp/>

ULTRA FACTORY presents

# ULTRA AWARD 2010

The Unprecedented Competition For The Students/Graduates from Kyoto University of Art and Design

**ULTRA FACTORY**



## はじめに

京都造形芸術大学ウルトラファクトリーは、2008年6月に設立された全学生が利用できる立体専門共通工房です。「新たな時代を切り開く、超越的創造力の創出」を理念に、第一線で活躍するアーティストを迎えて行う実践型プロジェクトをはじめ、技術力/思考力の向上を目的とした類例のない特殊教育の実践を試みています。創設より3年目を迎えた2010年春、次代を担う新たな才能の発掘と育成、世界で活躍できるウルトラアーティストの輩出を目的とした新たな試み・アートコンペティション「ULTRA AWARD」を始動しました。

「ULTRA AWARD」は、本学学内生および卒業生を対象に、国内外で活躍するキュレーター、批評家、アーティストで構成した豪華審査員陣による審査を経て、選抜された数名の若手アーティストがファクトリーを舞台に制作バトルを繰り広げるといった流れで展開します。各選抜者には、審査員陣によるアドバイス、スタッフによる技術支援、制作費補助、展覧会開催、本カタログの発行など、ウルトラファクトリー総力を上げた全面バックアップ体制を用意しました。一回目となる「ULTRA AWARD 2010」では、総勢42名の応募者の中から厳正なる審査を経て、4名と1組の若手アーティストを選抜。ファクトリーでの約4ヶ月間の作品制作期間を経た10月に、京都・三条にありますart project room ARTZONEを舞台に、展覧会、審査会を開催することができました。会期中に開催した審査会では、さらに最優秀作品を選出、受賞者には、ウルトラアーティストの称号とともに、今後も継続して、世界で活躍するための活動への支援を約束しています。

混迷の時代、新しい創造のエネルギーこそが、次の時代をつくる希望です。世界を変えうる可能性の輩出を目指し、ウルトラファクトリーは日々邁進を続けています。その一歩であるこの試みを通して、新たな才能の誕生に立ち会い、体感いただくことができれば幸甚です。

ウルトラファクトリー  
ディレクター  
ヤノベケンジ

## Forward

ULTRA FACTORY was established as a workshop for large scale works at Kyoto University of Art and Design in June 2008. In order to nurture unprecedented creativity to invent new cultural forces, the Factory invites eminent artists and designers to work on critical and practical projects together with students. In the Spring 2010, it has been 3 years since the foundation, the Factory kicked off the art competition ULTRA AWARD to search for the new talents and encourage them to work on the international context in the new future.

ULTRA AWARD is intended for the students and recent graduates from Kyoto University of Art and Design. After the jury with the prominent curators, critics and artists, shortlisted artists worked at ULTRA FACTORY to compete against each other. The Factory has worked with the artists closely to realize their plans; each artist was given tutorials by the jury members, the technical supports by the Factory staffs, stipend and the opportunity to exhibit their works with the bilingual catalogues. For ULTRA AWARD 2010, we received the total of 42 submissions and selected 4 individual artists and 1 artist duo after the rigorous interviews. In October 2010, after the 4 months of intensive work, the students exhibited their works at art project room ARTZONE located in Sanjo, Kyoto. The final jury was held during the exhibition and selected the best work. The winner of this award will be promised to have continuing support from the Factory to work internationally as an Ultra Artist.

In the times of chaos and depression, the only hope is the energy of creativity. To this end, ULTRA FACTORY continues to serve as a place to produce new creative forces. Through the exhibition, I hope you encounter and experience the birth of the new cultural paradigm.

ULTRA FACTORY  
Director  
Kenji Yanobe

## ULTRA AWARD 2010 概要

- 実施期間: 2010年4月-2011年3月(カタログ発行までを含む)
- 募集期間: 2010年4月1日(木)-5月31日(月)必着
- 選考期間: 2010年6月[上旬: 第一次書類審査/下旬: 第二次プレゼンテーション審査/末: 発表]
- 募集対象: 本学学生(通信・大学院、専門学校含む)、及び卒業生(卒業2年以内)
- 募集人数: 4名程度
- 募集内容: 最終的なアウトプットであるart project room ARTZONEでの展覧会に向けての作品プラン。  
 \*ウルトラファクトリーを使用しての作品制作を条件とする。
- 審査員: 長谷川祐子(東京都現代美術館チーフキュレーター)/浅田彰(批評家)/椿昇(現代美術作家)/名和晃平(彫刻家)/後藤繁雄(編集者・クリエイティブディレクター)/ヤノベケンジ(美術作家・ウルトラファクトリーディレクター)
- 特典: 1 | 個人制作場所の提供  
 2 | 10万円の制作補助費を支給  
 3 | ウルトラファクトリースタッフからの支援  
     → 技術支援  
     → 広報、プレゼンテーションツール制作支援  
 4 | ARTZONEでの展覧会  
 5 | 展覧会のカタログ(日/英)制作

## ULTRA AWARD 2010 Outline

- Implementation: Apr. 2010-Mar. 2011 (Including the publication of the catalogue)
- Application: Thu. 1 Apr. 2010-Mon. 31 May. 2010 (Must arrive)
- Selection: Jun. 2010 [In early Jun.: Primary documentary selection / In late Jun.: The second selection by presentation / End of Jun.: Results Announcement]
- Eligibility: Students of Kyoto University of Art and Design (Including the students of correspondence course, graduate school, and the students of affiliated schools); Graduates (Within 2 years)
- Number of shortlists: Around 4 persons
- Application details: Submit a work plan for the final exhibition at ARTZONE (It is conditioned to produce their works at ULTRA FACTORY)
- The Jury: Yuko Hasegawa (Chief curator of Museum of Contemporary Art Tokyo) / Akira Asada (Critic) / Noboru Tsubaki (Artist) / Kohei Nawa (Artist) / Shigeo Goto (Editor, Creative Director) / Kenji Yanobe (Artist, Director of ULTRA FACTORY)
- Awards: 1 | Provision of production space  
 2 | Donation of 100,000 yen as production costs to each shortlist  
 3 | Support by staffs of ULTRA FACTORY  
     : Technical support  
     : PR and support of presentations  
 4 | Participation at the ULTRA AWARD Exhibition at ARTZONE  
 5 | Publication of the exhibition catalogue in Japanese and English

# art zone

art project room kyoto



2010 AWARD 2010 DOCUMENT  
toki kake

Artists: Taro Komiya  
Eugene Kangawa  
Genki Isayama  
Yukako Hashimoto



Exhibition  
**ULTRA AWARD 2010**  
The Unprecedented Competition for The Students / Graduates from Kyoto University of Art and Design  
2010.10.23[Sat]-11.7[Sun]



協力: 株式会社 中川ケミカル







最優秀賞 | Grand-prize

諫山元貴 | Genki Isayama

《Χρόνος / Καίρος (クロノス / カイロス)》 | 2010

| マテリアル | ヴィデオ  
| material | Video



| コンセプト | 光で満たされた神殿のような空間が、音もなく崩れていく。壁一面に映し出された映像は、焼き入れをしていない磁器土製の柱が水中で崩壊していく姿を撮影したものだ。タイトルの《Χρόνος / Καίρος (クロノス / カイロス)》は、いずれも時間を意味するギリシア語である。一般的に、クロノスの時間とは人間の意識の外で刻々と流れている時間を示し、カイロスの時間とは内的な個別の時の流れを表す。映像で、流れている時間はクロノスの時間だが、この意識の外で流れている時間を意識下に、すなわちカイロスの時間として体感したとき起こる感覚とはどのようなものだろうか。

| concept | The space full of light like a Greek temple is collapsing soundlessly. The video projected on the whole wall was the record that unfired porcelain pillars were breaking down under water. Both *Χρόνος* and *Καίρος* (*Chronos* and *Kairos*) in the title mean "time" in Greece. Generally speaking, *Chronos* means sequential time apart from human's consciousness, and *Kairos* means an internal and an individual flow of time. The time sequence of the video is of *Chronos*. What would happen in our sense if *Chronos* was drawn under our consciousness, that is to say, if we experienced *Chronos* as *Kairos*?

| 審査員評 |

初期は母胎のような壺の中から血のような赤い液体が出てくるというように象徴的な意味が強すぎた。それが今回は精度とともに抽象度も高められて良かったですね。(浅田)

都市模型みたいなものが溶け出して崩壊していく意味合いの作品はほかにもあります。そういった解釈ができないような工夫が必要ですね。いきなり現実が介入してくるようなラフさを与えていくことでまた新しい見え方になるのでは。(長谷川)

諫山くんは今回獲得したクオリティをもって、海外に武者修行に出るべき。そうやって本当の真価が試されると僕は思います。(後藤)

| Individual Review |

In the early phase, his work had a too strong symbolic meaning in such a manner that a red liquid like blood flew out from a womb-like pot. But the level of accuracy and abstraction was improved in the finished work. (Asada)

There are other works featuring something like a diorama of a city destroyed and melted down. Some artifice is necessary to avoid such an interpretation. It may look different if the reality boldly intervenes in the work. (Hasegawa)

Isayama should train himself overseas maintaining the quality he achieved this time. That will be a real test of his ability. (Goto)



## ULTRA AWARD 2010 最優秀賞

### 諫山元貴 インタビュー



——最優秀賞受賞おめでとうございます。まずは、感想をお聞かせください。

僕が選ばれるとは思っていなかったのですが、正直すごく驚きました。浮かれてもいられないですが、純粋に嬉しかったです。審査会では、椿さんから「やっとアーティストになったな。これからお前はシベリアで一人籠って制作をするんだ、30年後にまた会おう」という言葉を、授賞式では、ヤノベさんから「もう地獄の扉を開けてしまった。続けなければ、銃殺する」と、恐怖の激励を頂きました。すごいプレッシャーですが、本当に有り難いことだと思っています。でも実は、6月に選抜作家に選出されたときから、これまでの展覧会では感じたことのないプレッシャーを抱えていました。「絶対的なクオリティを見せてほしい」という審査員陣のコメントに背中を押されたこともあって、選出された瞬間から、中途半端なものを見せることはできないと、スイッチを切り替えて取り組んでいました。

——今回の制作は、ご自身との戦いでもあったんですね。制作過程をふりかえって、何か思い出すエピソードはありますか？

ファクトリーでの制作が条件だったのですが、実は、制作段階の最後の最後に、今所属している広島で作業することにしました。それまで、広報チームの人たちから継続的にインタビューを受けていたり、テクニカルスタッフの方からもたくさんアドバイスを頂いていたこともあって、離れることに対する不安も大きかったですね。だけど、意を決して、広島に戻ったことで、この作品を自分が納得できる完成度まで仕上げることができました。この作品をつくるための、最も良い環境を突き詰めて考えた結果ということで、ヤノベさんも受け止めてくださって、感謝しています。

——条件を超えてでも、納得のいく作品をつくりたいという想いが結果を導きだしたんですね。諫山さんにとって、「作品づくり」とはどのような行為だと考えていますか？

僕が作品をつくるきっかけになった出来事のひとつに、夜中の真っ暗な海に全裸で入ったという経験があるんです。何も見えない、何も身に付けていない状態で、知覚が研ぎすまされて、言葉では表せないような複雑な感覚でした。日常からの解放感、死ぬかもしれない恐怖、身体が感じる感覚、そのすべてが入り交じったような……。僕は作品を観た人に、そのときの感覚を与えることができましたらと考えています。今回は映像作品として発表しましたが、以前、同じコンセプトでインスタレーション作品を制作したことがあります。水の入った水槽に、土でつくった器を入れて、それが崩れていく瞬間をお客さんと一緒に共有するという作品で。そのとき、大人も子どもも「わあー」って言ったんですね。それを聞いたときに、僕は作品をつくっていて良かったなと思いました。僕にとって作品をつくることは、そういう瞬間に出会うためのなにかかもしれません。「わあー」という言葉には、すごく複雑な気持ちが含まれているんですね。僕のコンセプトや思考を言葉で説明するのではなく、作品に託すことで、性別も年齢も飛び越えて、物事が純粹に見ることができるし、共有できることもたくさんあると思っています、そこに可能性を感じています。

——諫山さんの作品は、自身が体験した強烈な感覚を再生させる装置でもあるんですね。今回、半年間の濃密な制作期間を過ごし、大きな転機を迎えられたと思います。それを踏まえて、これからの展望についてお聞かせください。

広島で博士課程に進学して、制作を続けていこうと考えています。今回の制作では、どれだけ時間をかければどんな作品ができるかという自分の制作に対する目安を把握することができた機会でもありました。いつかは日本以外の場所で発表したいですね。異なる文化、場所で育った人たちにも共感してもらえる作品がつかれるのか試してみたい。どういう反応が得られるのか知りたいですね。制作に対する想いや根幹は変わらないと思うのですが、常に実験を繰り返しながら、まだ自分の中でも曖昧な部分をクリアにしていけるよう精進していきます。「これくらいで満足できる」という自分の限界を常に超える作品を生み出していきたいです。

——ウルトラアワードの記念すべき初回の受賞者として、これから挑戦する後輩たちへメッセージをお願いします。

ウルトラな作品をつくらないと、と負いすぎずに、自分自身が見てみたい作品、自分自身が満足できる作品をつくってほしいですね。僕自身にとってもそうでしたが、「これで満足できるんじゃないか」「これなら満足してもらえるんじゃないか」というレベルではなく、それを遥かに超えて、自らの限界を超えて、力を出し切る機会として捉えてほしいと思います。

## ULTRA AWARD 2010 GRAND-PRIZE

### Genki Isayama Interview

——Congratulation on your grand prize. How dose it make you feel?

I haven't thought I could win the grand prize, so it was a big surprise honestly. I can't be in festive mood for long, but I was purely very happy. At the review, Mr. Tsubaki gave me the words, "Finally you became an artist. You have to make works staying in Siberia all alone after this. I'll see you in 30 years." At the award ceremony, Mr. Yanobe gave me terrifyingly invigorating speech, "You have opened the gate to Hell. I will shoot you if you don't keep going." I feel a lot of pressure on myself, but it's an honor encouragement. Since I have been nominated for the shortlisted artist, I have been feeling pressure which I never had in other exhibitions. I was pushed by the jury's comment, "Show us your absolute quality." From the moment of nomination, I shifted my mind and thought, and I determined not to make a half-backed work.

——The creation should be a fight against yourself. Looking back on the process, are there any episodes you remember?

It was a condition to make the work for the award at ULTRA FACTORY, but actually, at the very end of the process, I have decided to make my work at a university in Hiroshima where I belong now. Until then, I gave interviews continuously from the PR team, and got a lot of advices from the technical staffs. So I felt anxiety about leaving, but I determined to return to Hiroshima, and I could complete my work in satisfactory quality. Mr. Yanobe accepted my decision since it was a conclusion of my careful thinking, and I appreciate it.

——Your passion to create a satisfactory work brought about the result. What does "creating works" mean to you?

One of my triggers to start my creation is the experience to enter the dark sea with nothing on in midnight. I couldn't see anything and wore nothing, and I felt my sense to be sharpened. It was complex feeling which I couldn't explain with words. It gave me a sense of

freedom from everyday things, the fear of death, body sensations, and the mixed feeling of them. I would like to make viewers feel that sense in my work. I used video this time, but I had made an installation work with the same concept before. I put vessels made of soil in the water and I shared the moment with the viewers. Then, both adults and children lost their words. They stared at the scene and said just "Wow". When I heard that, I was really glad that I had been making works. I would say I create work to encounter such moments. The "Wow" contains really complex feelings. Not by explaining my thoughts and concepts with words, but by leaving them with my works, people can purely enjoy regardless of their ages and sexes, and I can share many things with viewers. That's the points I see potential in.

——Your work also performs as a device to reproduce your intense experience. You came to a major turning point after six months of the condensed period. In light of this experience, what are your future prospects?

I will go on a doctor's course and continue my creations. This work also gave me a good opportunity to know how long it takes to complete a work and what it will be. I'd like to show some of my works outside Japan, and see if I can make works which raise sympathy of people who grew up in different places and cultures. I want to know what kind of reaction I can get. I think my basis and passion for creation won't change, but I will continue to try experiments and identify gray areas in myself. I will try to go beyond my personal limitation and constantly break through the level of satisfaction.

——Please give a message to younger artists who will take on a challenge in ULTRA AWARD as a grand prize winner of the first award.

Don't be too much excited to create an ultra work, and just make a work you would like to see and satisfy yourself. I'd like them not to think, "Maybe I am satisfied with this." nor "This will meet their expectations." But, far beyond that level, I hope the award to be the opportunity to exceed one's limit and do one's best.

審査員特別賞 (選・長谷川祐子)  
Jury's special prize (selected by Yuko Hasegawa)

小宮太郎 | Taro Komiya

《vener》(a spiral staircase) | 2010

| マテリアル | 木材、ペンキなど  
| material | Wood, Paint, etc.



| コンセプト | 鏡は、すべての現実を手の届かない景色へと変換してしまう。それがたとえ、どんなに大きなもの、重いものであったとしても鏡を通すと、それらに触れられずに見るものへと変換される。今回、アートゾーンという展示空間、物質的に存在する場そのものを見るためのイメージ、造形物へと変換する可能性に挑んだ。実際にある螺旋階段の反転した鏡像をつくりあげることで、現実にある階段はイメージへと変換され、この空間自体が反転した世界と共存する。この場は、人に“鏡”を想像させるための装置として機能し、また、この場と人が触れ合うことで、新たな世界の境界線を想像してもらえたらと思う。

| concept | A mirror transforms everything real into a vision out of one's reach. It is transformed into a thing not tangible but visible no matter how huge or heavy it is. In this work, I explored the possibility to convert the exhibition space of ARTZONE, the physically existing place itself, into an image to see, a plastic object. By fabricating the mirror image as the inversion of the spiral staircase, the real staircase is transformed into an image, and the space itself coexists with the inverted world. That space functions as a device to prompt people to imagine a "mirror" and the boundary with the new world by the direct interaction with the space.

| 審査員評 |

従来のミラーなどを使った作品はオブジェとしてチャーミングすぎることもあった。今回はベニヤ板とホース、それにペンキだけで鏡像反転という原理を明示できていて、見事でした。(浅田)

サイトスペシフィックなものには彼にとってある種の進化。さらに寒川君と同じ空間にすることで、発生した「とある出来事」に注目。単体の作品にはないバイブレーションを察知するセンスを磨いてください。(椿)

一見、完璧な対称形で双子の階段のようですが、ステップの木をむき出しにしていたり、1レーン空欄にせずらしていますね。現実からの離れ方、ずらし方が非常にうまくいっていたと思います。(長谷川)

| Individual Review |

His previous works using mirrors were too charming as objects. On the contrary, this work beautifully illustrated the principle of a mirror image reflection only by plywood, hose, and paint. (Asada)

He stepped up with the site-specific solution. By the same token, the "happening" made by putting his work in the space sharing with Kangawa is notable. Improve the sensitivity to feel the vibration that a single work cannot create. (Tsubaki)

At a glance, his work looked like twin staircases of perfect symmetry, but the one was stripped to the bare wood and one step was displaced from it. The way to make a difference between the reality and the work was successful. (Hasegawa)

## 寒川裕人 | Eugene Kangawa

### 《Gate》 | 2010

| マテリアル | ガラス、スチール、アルビノ白メダカ、延命剤、植物、水、砂ほか

| material | Glass, Steel, Killifish, Life-sustaining drug, Plant, Water, Sand, etc.



| コメント | 病気で末期にある小さな魚が、延命剤の溶かされた大きな水の中を泳いでいる——ターミナルケア（終末治療）を施されている時間、そして“境界”にある延命装置として、“Gate”を置いた。同じ空間で、同じ水を栄養源として植物が育つ。生の間、永く保たれるエネルギーは他方で瞬間に解放され（だが同じ質量を持つ）、その瞬間のエネルギーは圧縮されきれない圧倒的な質量を持っている。自身が直面した死、そして供儀の体験。情報としては、理解していたつもりであったそれらとの乖離に愕然とし、この差異は、現在、そしてこれから発生するであろうその他の問題にも開かれるのではと考え、ここに至った。

| concept | Small fishes in the end-stage of a disease are swimming in the water in which life-sustaining drugs are dissolved. I set the *Gate* as a life-sustaining device on the “boundary” and in the team of implementing the terminal care. In this aquarium, plants grow by the same water as its source of nutrition. The energy maintained in a life is freed at a certain moment (but the mass is unchanged), but the energy of at moment has an incompressible overwhelming amount of quantity. The death I faced, and my experience of sacrifice. I was shocked by the gap between what I understood as knowledge and the experiences. The difference could open up other questions that is happening and will happen. This is why I decided to make this work.

#### | 審査員評 |

シャープな感覚や、生と死という大問題に挑む勇氣は買うけれど、作品全体が祭壇のように見えたりして、象徴性が強すぎるようにも思います。(浅田)

彼は期待の新星。期待が大きいだけに、内容が説明的であるとか、もっとここを崩せといった複雑な折り込みは要求されていくだろうけど彼はそれに応えるでしょう。謎とエロスを説明的にしないために教養を積むべし。(椿)

病の魚が復活していくという小さな物語が、スペクタクルで立派な棺桶によってかき消されてしまうような、バランスの悪さを感じました。他のファブリケーションのやり方を模索してみてもどうでしょうか。(長谷川)

#### | Individual Review |

I acknowledge his sharp sensitivity and courage to approach the big problem such as life and death. But the whole work looks like an altar and its symbolic nature was too strong. (Asada)

He is a promising new star. Because of the big expectation, difficult tasks would be required of him to get over, for example, to improve the explanatory character of his works and to make representation more casual. But I think he can make it. Cultivate educated minds not to represent the mysteries and Eros merely descriptive. (Tsubaki)

The short tale of recovery of a diseased fish was washed out by the spectacle of the beautiful coffin, which was way off balance. I recommend him to search for another way of fabrication. (Hasegawa)

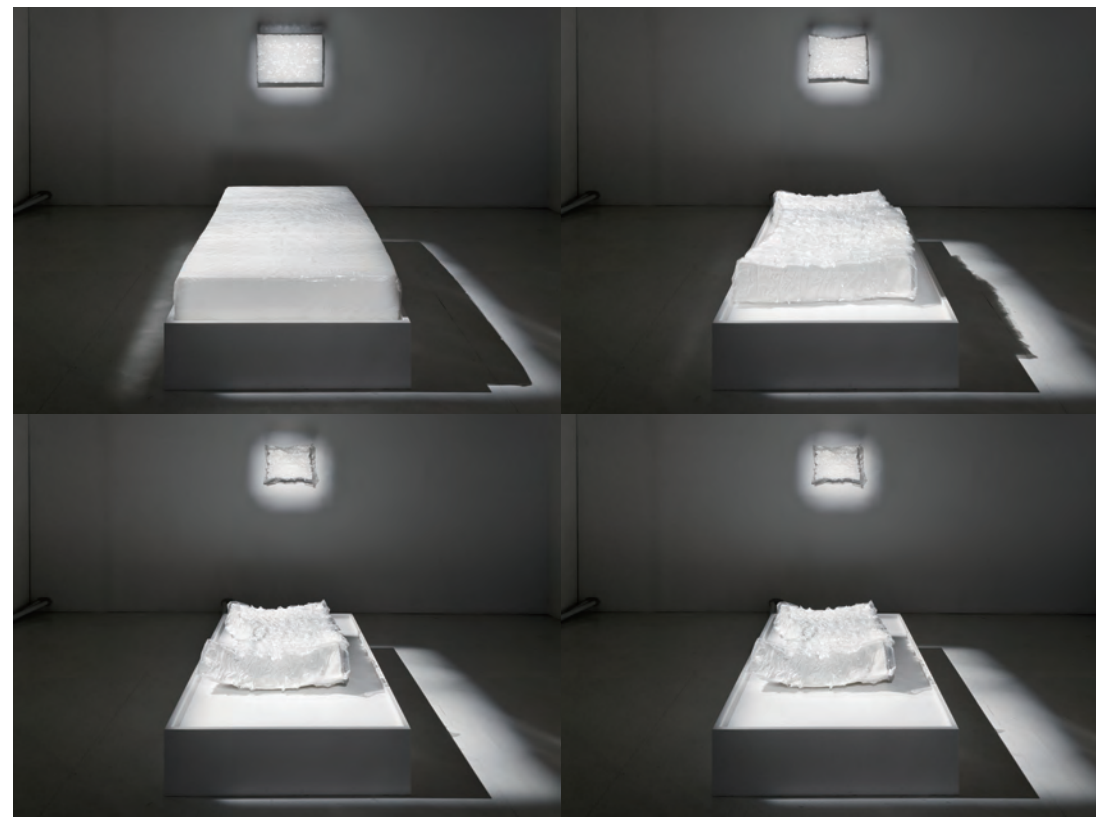
## ときカケ | toki kake

《同時多発ラグプロジェクト ~呼吸編~ “my rhythm your tempo”》 | 2010

《Synchronized Multiple Lag Project -the first series: breathing- “my rhythm your tempo”》 | 2010

| マテリアル | ミクストメディア |

| material | Mixed media



| コメント | 「それぞれの持つ、独自の基準への回帰」を目的とした「同時多発ラグプロジェクト」第一弾 呼吸編。——きみの基準はいったいどこ“なう”!? 差があることはあたりまえ。自身とすべての“もの”は言うまでもなく別ものだ。けれど、その間の境界がどんどん曖昧になっている。ぼくたちは携帯でどこかの誰かとつながり、Twitterで誰かの“なう”を知り、誰かがつくった流行ものに、すさまじく飛びつく。たくさんの情報を共有し、独自の基準ではないものを自分の中に取り込んで変換しきれずにそれがあたかも自身の基準だと信じて疑わない。呼吸という独自のリズムテンポを使い、きみの呼吸を基準に、作品との間にラグを起こす空間をここに作る。きみの基準はここ“なう”!

| concept | “Return to one’s standard which belongs to each individual” is the purpose of our work, *Synchronized Multiple Lag Project -the first series: breathing-*. Where is your standard “now”!? It is natural that there are differences. Needless to say, one and all others are different. But the boundary between them is getting fuzzy. We connect with someone by mobile phones, receive somebody’s “now” in Twitter, and jump to trends someone else made. We are sharing a lot of information, and absorb things not of one’s standard. One strongly believes that it is one’s own standard, but there is still a “lag” between them. This work produces the space where the “lag” is revealed by the means of breathing, which is one’s unique rhythm. Your standard is here “now”!

### | 審査員評 |

今回の展覧会をきっかけにしてステップアップすることができたという段階で、ある程度留まっている、という印象です。(後藤)

アートの空間に出てくるのが初体験というところで作品全体がナイーブ。それをアートにするにはどうすればいいかという構造(法律?)をこれから学ぶと飛躍すると思います。まず身近なパラモデルや淀テクの戦略を分析すべし。(権)

その試みやコンセプトも面白いのですが、あれだけだとやっぱり分かりにくいですね。複数のプロジェクトを並べて、同時多発ラグの様子が分かるように、観客が実際に介入できるものも混ぜていくと面白いと思います。(長谷川)

### | Individual Review |

My impression was that toki kake stepped up in this exhibition but they did not go further. (Goto)

The whole of the work was naïve since it was the first time for toki kake to work in an exhibition space. They could make a big leap if they learned the structure (or the law?) to make their works as art. Analyze the strategies of familiar examples such as Paramodel or Yodogawa-technique. (Tsubaki)

Although their attempts and concepts were interesting, their current work was hard to figure out. It would be more interesting to assemble several projects, or to involve the audience in the work so that they experience the “multiple lags”. (Hasegawa)



橋本優香子 | Yukako Hashimoto

《近く 遠い すべてのこと》 | 2010

《Everything both close and distant》 | 2010

| マテリアル | 闇、光、卵、印画紙

| material | Darkness, Light, Egg, Photographic paper



| コメント | 宇宙のはじまりは、小さな「点」だったという。それは今、あらゆる事物を包み込むほど大きくなった。この世界に存在するすべてのことは、小さく些細な点のように存在し、広大な全体の一部となっている。それらの点はそれぞれに意味を持ち、またそれのみでは存在できない。それらは現れ、他と関係しあい、無くなっていく。また、現象として世界に浸透し、世界はその後も拡張していくのだろう。今作は、カラーフォトグラムによるものである。完全暗室の中で印画紙上に直接物質を置き、それを感光させることで制作される写真作品。闇の中の光によってイメージが生み出されるこの現象は、この世界のすべての存在が発生することを思い起こさせた。視覚を完全に閉ざされた闇の中で、物質の感触、温度、匂い、湿度などその存在を強く感じた。確かに触れられる距離に存在し、焦点距離ゼロで焼きつけることで表出されたイメージは、広大な宇宙の一部となっているように思えた。生をはらんだ小さな点ひとつひとつが、確実に世界を構成し存在している。

| concept | The dawn of the universe is said to be a small "dot". It has grown big enough to contain everything now. Each thing in the world exists as a negligible small dot and constitutes a part of the vast whole. Each dot has its meaning, but it can not exist alone. Those dots appear, interact, and disappear. Also, the processes penetrate into the world as phenomena, while the world keeps expanding. This work is made by color photogram. I produced this work by putting objects directly on photographic papers and exposing them in a completely dark room. The process of creating the images by lights in the dark reminded me of the birth of all existences in the world. In the completely blind darkness, I strongly felt the texture, the heat, and the smell of the objects, and recognized their existences in a close distance. The images printed in focal length by 0 seem to be a part of the vast universe. Each small dot contains a life. It surely exists and constitutes the world.

| 審査員評 |

今まで迷ったり色々してたけれど、その中でも一番の飛躍というか、腹のくくり方が実際作品のクオリティとしても出たと思います。(後藤)

彼女には小さなドローイングとか輝くものもありますが、ある空間の中で作品として自立しませんでした。今まで手とイメージの中だけにいたのが、今回身体レベルで拡張したことが最大の収穫。細部とスケールの謎を解決すべし。(橋)

フォトグラムという手法は偶然的な面白さはあるんだけど、そこから抜け出て、どう造形的に強いものをつくるかだと思います。もう少し戦略的に、膨大な数をつくってみたりした上で、辿り着くところがあるのかもしれないと思いました。(長谷川)

| Individual Review |

She faced difficulty making her work and tried many different ways, but she made the most significant advance of all the nominees. Her determination was reflected in the quality of her work. (Goto)

She has some virtues like small drawings but her previous works did not stand out as an artwork. Her idea had been represented only on palm-sized works or remained as merely images, but, this time, she succeeded to develop at a physical level. Find your answer to the mysteries of detail and scale. (Tsubaki)

Photogram appeals accidental effects, but her task is how to manipulate them and build up plastic forms. She may be finding something after making a huge number of works strategically. (Hasegawa)

## 作家略歴

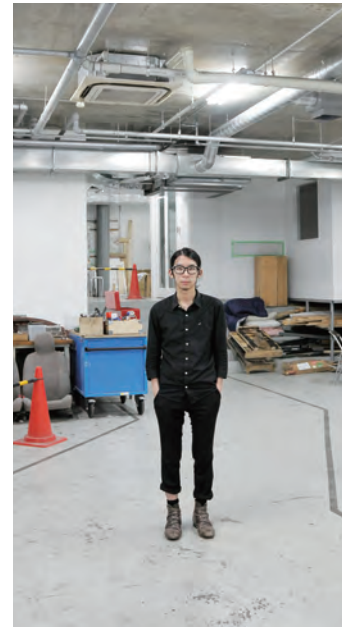
### Artists Profile



諫山元貴 | Genki Isayama



小宮太郎 | Taro Komiya



寒川裕人 | Eugene Kangawa



ときカケ | toki kake  
藤本亜希 (左) Aki Fujimoto (Left)  
中條美美 (右) Fumi Chujo (Right)



橋本優香子 | Yukako Hashimoto

#### 諫山元貴 | Genki Isayama

1987年、大分県生まれ。2009年、京都造形芸術大学 美術工芸学科 総合造形コース卒業。2009年、広島市立大学 造形計画学科 現代表現コース入学。大学在学中の2005年、第1回アーティストサミットにスタッフとして参加。「エロティシズムにいたる時間感覚」をテーマに「ある物」と「ある物」が交わる瞬間を捉え、双方が侵食しあう痕跡を表すための枠を形づくる。土、石膏、花、水、動物の臓物など、さまざまな素材を使用して映像や立体、平面などを使い作品を展開する。

Born in Oita in 1987. Graduated from Mixed Media course in Department of Fine and Applied Arts in Kyoto University Art and Design in 2009. Currently studying at Division of Contemporary Art and Theory in Graduate school of Art in Hiroshima City University. He participated in "Artist Summit, Kyoto" as a management staff while studying. Working with the theme "Sense of time leading eroticism", he captures the moment of mixing one thing with the other, and makes a frame to show the traces of invading the border. Using various materials such as soil, plaster, flower, water, and offal, his works range over video and 2&3D sculpture.

#### 小宮太郎 | Taro Komiya

1985年、神奈川県生まれ。2008年、京都造形芸術大学 芸術学部 美術工芸学科 総合造形コース卒業。2010年、京都造形芸術大学大学院 修士課程 芸術研究科 芸術表現専攻修了。現在、同大学院 博士課程 芸術研究科 芸術専攻在籍。絵画や鏡などをモチーフに「イメージとは何か」を考え、

作品制作を行う。回転や振動といった現象を用いて視覚のイリュージョンを生み出す立体作品、空間そのものを絵画(虚像)空間へと移行させるインスタレーションなどを展開。

Born in Kanagawa in 1985. Graduated from Mixed Media course in Department of Fine and Applied Arts in Kyoto University Art and Design in 2008. Received a certificate of master's course in 2010. Currently studying at Doctor's course in Fine Art in the same university. Using paintings and mirrors, he is working on the concept of "what is the image." He has been producing the sculptures which create illusions by rotations and vibrations and the installations which convert the space to pictorial, virtual space.

#### 寒川裕人 | Eugene Kangawa

1989年、アメリカ生まれ。2009年、京都造形芸術大学 情報デザイン学科 プランニングディレクションコース入学。高校時代より平面・写真などを独学で習得し、制作活動をはじめ。大学入学後、美大選抜展「The Six! 09」(東京、art complex center of tokyo)に選出され、ホテルモンテレにて開催された「アートフェア京都」に最年少で出品するなど、出展歴多数。平面絵画、グラフィック、映像、音楽、インスタレーション、更には大型イベントディレクションなど領域を問わず精力的に活動を続ける。

Born in America in 1989. Currently studying at Planning Direction course in Department of Information Design in Kyoto University of Art and Design since 2009. He started working with photography and 2D works in high school. Participated in

"The Six! 09" (art complex center of Tokyo), and "Art Fair Kyoto" at Hotel Monterey as the youngest artist ever. He keeps working borderlessly such as paintings, graphics, video works, music, installations, and as a director of an event.

#### ときカケ | toki kake

2010年5月、ファッションデザインの分野で活動する藤本亜希と、イラスト・パフォーマンスなどを発表する中條美美的2人により結成。それぞれが持つ、異なった背景のインスピレーションを元に「純粋な気持ちで今表現したいこと」を追求し、デザイン/美術の領域にとらわれない多様な作品をつくりあげていく。

toki kake was formed in May, 2010 by Aki Fujimoto, who works in the field of fashion design, and Fumi Chujo, who works in illustration and performance. toki kake expresses "What we really want to present now" based on different background of each members, and produces various works beyond the border of design and art.

#### 藤本亜希 | Aki Fujimoto

1988年、兵庫県生まれ。2007年、京都造形芸術大学 空間演出デザイン学科 ファッションデザインコース入学。

Born in Hyogo in 1988. Currently studying at Fashion Design course in Department of Space Design in Kyoto University of Art and Design since 2007.

#### 中條 美美 | Fumi Chujo

1988年、宮城県生まれ。2007年、京都造形芸術大学 空間演出デザイン学科 空間演出デザインコース入学。

Born in Miyagi in 1988. Currently studying at Space Design course in Department of Space Design in Kyoto University of Art and Design since 2007.

#### 橋本優香子 | Yukako Hashimoto

1987年、東京都生まれ。2008年、京都造形芸術大学 芸術学部 美術工芸学科 洋画コース入学。現在、京都造形芸術大学 芸術学部 美術工芸学科 総合造形コース在籍。「とりこぼされてしまうような存在に対する肯定」を作品の主題としてきた。「呼吸」「浸透」「鼓動」といった言葉から受ける感覚を元に、キャンバスの上に偶発的に発生させた染みから、幾重もの線や色を紡いでいく絵画やフォトグラムなどを制作。

Born in Tokyo in 1987. Enrolled in Painting course, Fine and Applied Art at Kyoto University of Art and Design in 2008 and now studying at Mixed Media course. She is dealing with the theme "Affirmation of peripheral and ephemeral existence". Her works are based on the fundamental concepts such as "breathing", "infiltration", and "heartbeat". Her paintings and photograms use the spots incidentally generated on canvases which develop into layers of lines and colors.





Photo Document by ULTRA FACTORY PRESS + ARTZONE Staff [Tue. 17 Aug. 2010–Tue. 19 Oct. 2010]



ウルトラならではのアワード

ヤノベ: 今回良かったことは、やはり作品をつくるプロセスに僕たちがきちんと関わるシステムをつくれたことですね。既存のコンペティションでは応募作品をそのまま評価するとか、プランだけを見て、最終的には展覧会で作品を提出するようなことも多いですが、ここでは制作途中にも面談を実施したり、技術的な面でも、ファクトリー機能を持つ機関としてサポートできました。そうすることで、学生たちの制作に対する意識が大きく変わったのではないのでしょうか。これは他のコンペには無いシステムだと思います。ウルトラファクトリーは、ウルトラプロジェクトを通して、ものづくりが社会に直接つながっているという緊張感を得ることができる実践教育の現場です。その延長において、ファクトリーが直結したような環境の中、ある種の完成度を要求される現場に、選ばれたアーティストとして、背中を押されるという状況が、大きな意識改革につながると考えています。僕自身、「キリンアートアワード」を受賞した大学生のときに、大きく背中を押されて社会に出れたので、今まで覚悟を持って続けることができたという体験が大きく影響していますね。

名和: 僕も「キリンアートアワード」では、いろんな人が賞をとっているのを知っていたので、学生時代になんとなく気にはなっていました。でも、ずっと出すつもりは無かったですね。なんか、あるハードルを感じていて、それを越えられるような作品ができないうちは別に出す必要はないなと思っていました。大学を卒業したときに出したのは憶えています。自分が向かっていくための壁、ハードルみたいな目標として、ウルトラアワードが存在していったらいいのではないかと思います。

ヤノベ: お膳立てをしすぎているのではないかという意見もあるけれど、そうではなくて僕は、あえて厳しい状況に送り込んでいるという認識で捉えています。いわば、後戻りできない状況をつくっている感覚。授賞式のときには、大賞を受賞した諫山に向かって「大賞はとったけれど、喜んではいけない。君は地獄の扉を開けてしまったんだ」と話しました。それは、ある意味、そのポジションを落とさずに前に進みたくないという、地獄の苦しみを背負いながら、歩き続けてほしいという意味で言ったんです。常に自分が制作を続けていくときに、あの人が見ているから自分は頑張らないといけないという「目」があることは、とても重要なことですね。「お前なんか何しても知らんわ」ではなく、「お前がやることはずっと見てる、失敗したら銃殺だぞ」(笑)と。

#### 選抜作家の意識、作品について

ヤノベ: 諫山以外のみんなもすごかったと思います。

名和: 小宮の最後にアイデアをひっくり返して生まれた爆発力と勇気なんかは評価したいですね。もうダメ出しの連続で、最初は何を持ってきても全部ダメやったから。

ヤノベ: 最後、プランが決まる瞬間に横にいたけど、おもしろかったね。追い込んで、追い込んで、追い込んで、あと10分で「答えを出せ」って言ったら、座り込んで考えて。他の作家のプランが決まって最後、「じゃあ、小宮どうする」って言ったら、「わかりました、もうこれしかないと思います」(笑)と。その言葉を聞いたときには、本当に背筋がゾクッとしましたね。それなら間違いない、それをやれ、と。また、橋本は大胆に作品展開ができて、かなり飛躍的な伸び率を見せました。作品もいろいろな意味の読み取りができるし、これから踏み出していく一歩としては大きな結果を残せたと思います。

名和: 彼女は可能性やポテンシャルが一番高いですよ。これからまだまだ飛躍するし、自信を持ってほしいという意味でも今回のアワードに選ばれたことは良かったですね。寒川に関しても、独自の世界観と、哲学的な思考の質は高いと思います。アウトプットにまだ硬い部分があるので、人にどう伝わるかを感覚的につかむ経験を増やしていけば良いですね。彼は今の学生には珍しく野心的だし、志があるので非常に期待しています。

ヤノベ: ときカケもキャリアは無くても、熱心にリサーチを続けたり、制作にも熱心で、なかなか健闘してくれました。

名和: そうですね。ときカケは、良い形で工房の技術支援を受けることができたと思うんです。あれは、技術支援がないと絶対できなかつたし、本人たちも、その技術支援に頼りっぱなしじゃなくて、自分たち自身で毎回アップデートして、良いものめざそうという姿勢を崩さなかったから。二人組のアートユニット、今後の展開が楽しみです！ あと、今回のウルトラアワードは、彼らの作品や奮闘している姿を横目に見た他の学生たちが、「くやしい」って思うようなものにしたかったんです。「うわ、出しといたら良かった」って。審査員の顔ぶれを見て怖じ気づいたり、制作費が大した額ではないなどの理由で応募をしなかった学生も多かったと思うんですけど、今回の学生達は実際ものすごく成長した。やっぱり、同級生たちが殻を破る、変貌する瞬間みたいなのを目の当たりにすると、焦るんですよ。マイペースに生きることも、もちろん良いと思うんですけど、いつか自分の持つすべてのエネルギーを注ぎ込むような機会がないと、なかなかこの閉塞的なムードから脱出できないんですよ。その突破する感じをつくりたかった。それが今回それぞれの中で起こったんじゃないかと思います。



ひとつの教育機関として

ヤノベ: 作家本人だけではなく、多くの意識を変えることができたのは、やっぱり今回のウルトラアワードの成果ではないかと思っています。夢を見られる場所、そういう部分を担っていける場所にもなってほしいですね。「キリンアートアワード」は、バブル期だったこともあるけど、何かとんでもないものが生まれるような、ある種のエネルギーが渦巻く状況が、時代にも場所にもありました。それが経済の悪化とともに、いろんなアートセンターやコンペも無くなっていった。社会

を変えていけるような引力のある場所が無くなっていくなら、やはり、ものをつくって世の中を変えていくしかない。

名和: だからこそ、ものづくりの現場が重要になってくるんですね。

ヤノベ: そこに、ウルトラファクトリーの存在意義があるんだと思っています。いち教育機関が、どこまで状況を変えていくことができるかを実験することによって、これまでの教育システムが変わったり、それが世の中に広がっていく可能性をつくれればいいかなと思っています。そういう意味では、今ここでアワードというかたちで、トップクリエイターをエリート教育するということは、決して間違いではない方法だと思っています。

名和: そうですね。でも、言ってしまうと、その後、全員がアーティストにならなくてもよくて、アートにまつわる仕事、あるいは全くアートに関係なくても、クリエイティブな仕事というのはここまでやらないといけないんだと思知ることが大事。そういう社会適応能力、人間力みたいなものを実践現場において磨いていくことは、どんなコースの学生にとっても求められていますからね。

ヤノベ: もちろん。アーティスト、クリエイター、トップクラスの人たちが関わる現場でもあるので、それを間近に感じることで、触発されて自分のなかの才能をトップレベルまで引き出せる可能性もある。そういう意味では非常に広い範囲に、ある種多領域に開いている、先鋭的な切り込み方をするような教育システムにもなり得るのではないかなと考えています。目標に向かい限界に挑戦することを通して、社会状況が変わったり、人間が変わったりするという事実を味わうべきだと思います。自分たちも含めて、ちゃんと人間としてどう歩いていくかということをフィードバックしながら、お互い成長していく現場をつくらないといけないですね。教える方も教えられる方も、真剣勝負。真剣に機能して、行動を起こせるような場をつくる、ひとつのテストケースだと考えています。

名和: ウルトラアワードは、審査員自体が逆に問われるような場所でもあった感じでしたね。それは、教える側の、今新しいものは何かとか、向かうべきところはどこなのかという意見のぶつけ合いの現場でもあると思うんです。

ヤノベ: アワードは、数年は必ず続けて、その影響がきちっと現れてくるときまで見届けたいといけません。どういう形であれ、クリエイティブな気持ちが状況を変えていくっていう姿勢は崩さないように。

## Looking back on ULTRA AWARD 2010

### Kenji Yanobe and Kohei Nawa discussed the event's sequel.

#### NO AWARD BUT ULTRA FACTORY COULD DO

**Yanobe:** One good thing in this competition was that we could create the system, which enabled us to get engaged in creating works. In conventional competitions, the entries are just evaluated, or, in many cases, the works are sent to the exhibition judging only by the plans, eventually. But this time, we could counsel the participants during their working processes, and we could also give supports to their technical issues, as we owned a factory. Those things might change students' motivations towards their works. I think this is a unique point of ULTRA AWARD. Through Ultra Project, ULTRA FACTORY gives a practical education to students with a sense of tension so that they realize that manufacturing is directly connected to society. As a continuation of this situation, where a student is directly linked to the Factory, a certain level of perfection is expected for his work, and he may be encouraged as a selected artist. This would result in a dramatic change in the student's minds. This comes from my experience when I won Kirin Art Award in my schooltimes, which gave me some expectation before I entered the real world. This is why I could have done my job with resolution.

**Nawa:** I knew that many people won prizes in Kirin Art Award, so it was on my mind when I was a student. But I hadn't determined to send my work there. I felt that, to apply for the competition, I had a hurdle to overcome, and I didn't think it necessary to apply unless I reached the required level. I remember that I made an application when I graduated from my university. I hope that ULTRA AWARD will be a heavy cross to bear or a major target for art students.

**Yanobe:** Some may say that we too much arranged the stage for students, but I recognize that we let the students go into a rigid situation. In a sense, it is the situation of no return. At the award ceremony, I spoke to Isayama, the winner of the grand prize, "You

got the prize but you had better not be delighted. You opened the gate of Hell". That means, in a way, you never allowed losing the position, you must carry on efforts in spite of tortures of the damned. It is so important to suppose somebody's eyes that always keep watching on him and encourage him when he is working. Instead of "That's none of my business," the eyes can tell, "I always keep watching on your work. I'll shoot you if you fail". (Laughing)

#### For the Selected Artists' Motivations and Their Works

**Yanobe:** Besides Isayama, all the other artists were great too.

**Nawa:** I have to give credit to Koyama for his courage and his explosive power when he turned his idea upside down at the end. At an early stage, any of his plans were no good and I urged him to improve.

**Yanobe:** I was next to him at the last moment when he determined his plan. It was pretty interesting. He was pushed, pushed, and pushed, then he sat down to think over again when I said he got 10 minutes left to decide his plan. After all the other artists decided their plans, I asked, "So what do you do, Komiya?", then he said, "Ok, this is the only conclusion I could make". (Smiling) When I heard it, I got a chill with a sensation of joy. Then I said, "That must be right. Just do it." Hashimoto daringly developed her work and showed significant improvement. I could read multiple meanings in her work, and I think she had a good result for her first step to start her career.

**Nawa:** Her possibilities and potentials are more intriguing than others. She will probably make great strides in future. It was good for her to be short-listed for the award at this time in terms of getting confidence. I think Kangawa has a unique world-view, and his philosophical thought is pretty good. But his expression is still inflexible, so he needs to gain experience so that he will be sentient of how his work is read by people. He is remarkably ambitious for a today's student and he has high

motive, so I count on him very much.

**Yanobe:** toki kake also did well. They had kept researching enthusiastically, and worked hard even if they did not have any career.

**Nawa:** That's right. toki kake could get good technical supports from the workshop. Their work might be impossible without the technical supports. toki kake themselves didn't just depend on the supports, but they updated themselves every time, and they kept trying to create better works. It will be interesting to see how the artist duo performs in future! Also, I wanted to make the other students feel "regret" for not applying for the competition when they saw participant's works and their attitudes of struggling. I wanted them to say, "Oh, we should've made an entry!" I suppose that some students gave up to take part in the competition because they got scared when they saw the juries and the production cost was not so big. But the participating students actually developed their skills a lot. Generally, students get upset when they see the evolution of their classmates. Doing things at one's own pace is surely good, but they need to spend all their energy working at some point. Otherwise they cannot break through a cooped-up feeling. I wanted to let students do so. I think this might happen in each student at this time.

#### As an Educational Organization

**Yanobe:** The outcome of ULTRA AWARD is not only to change artists themselves, but also many other people's minds. I expect ULTRA AWARD to give the occasion where they can see their dreams. Kirin Art Award was in the Bubble period. There used to be such time and place full of energy that provided desirable situations to create something incredible. As the economy became worse, many art centers and competitions disappeared. In case we lose those attracting places to change society, we need to create works to change the world.

**Nawa:** That's why manufacturing fields are important.

**Yanobe:** The meaning of the existence of ULTRA FACTORY lies at that point. We are exploring the possibility to change the existing educational system and make an effect on society by examining how far an educational organization can change the current situation. In that sense, it is not a wrong way to give an elite education aimed at cultivating top creators through this award.

**Nawa:** You've got a point. But, frankly speaking, all of the students do not have to become artists. It is okay if students can realize that they have to achieve a certain level at creative jobs whether they are related to art or not. The students in any course are required to improve such abilities of social adjustment and human skills at a practical workplace.

**Yanobe:** Of course. ULTRA AWARD is also the place to communicate with artists, creators, and top-class people in different fields. Having them in sight and being inspired by their works, students may bring out their latent talents up to the top level. In that sense, it could be an innovative educational system, which is open in a wide range of areas. Students should experience that a social situation and people can change through making efforts to achieve their goals and limits. We need to make an occasion where everyone concerned, including ourselves, can give feedback each other and grow as a person. Both teachers and learners are for keeps. I think it is a test case to create workable circumstances where people can make actions earnestly.

**Nawa:** I felt that the juries are conversely tested in ULTRA AWARD. It gives an opportunity to exchange opinions for the teaching side, what is new, or what to aim.

**Yanobe:** We must keep on this award for several years until its influences come up. Whatever it will be, we should keep the attitude that creative emotions change situations.



ULTRA AWARD 2010 審査総評  
ULTRA AWARD 2010 General Review



浅田彰  
Akira Asada

コンセプトの審査に始まり、何段階もフィルターをかけて選んだ案を、技術的にサポートしながら、最終作品まで持っていく。そういう手のかかる賞だけに、それに値する結果が出て良かったと思います。ウルトラファクトリーの技術的サポートを利用して、これまでより一段と完成度の高い作品をつくったという意味では、諫山さんの作品が大賞をとったのは順当でしょう。展覧会全体としても、小宮さんの作品がゲートになり、そこから水平に入って来た線を寒川さんの作品が垂直に屈折させるというように、それぞれの作家の個性が共鳴しあって、いっそう面白いものになっていたと思います。

The process of this award began with screening the concepts, and we carried out the proposals selected in several stages into final pieces with our technical supports. It was good to attain the results worth the effort. Come to think of the processes to gain the levels of the works' quality with the technical supports of ULTRA FACTORY, Isayama's work was appropriate for the grand prize. In the whole exhibition, Komiya's work functioned as a gate, and the "line" horizontally coming through from his work was inflected into a vertical flow by Kangawa's work. Individual characters of all artists created a rapport, which made the exhibition all the more interesting.



後藤繁雄  
Shigeo Goto

今までの学生の賞というのは、大学での達成というレベルになりがちですが、このアワードは学生レベルではなく、アーティストとしてデビューする人たちの水準で選んでいて、そのための資質、体力、気力、クオリティというものの確認がポイントです。そのことも展覧会の出来にもよく反映されていたと思いますし、そこから生み出されたもの、ライバルは世界だと思います。今回が一回目だけでも、これが続いていくことにより、アートシーンの形成というものも射程に入れた上で、同級生、下級生たちが「ああいう風にやっていけばアーティストとして戦っていけるんだ」ということを彼らが骨身にしみるように行動で示して、今後とも頑張ってもらいたいです。

Conventional school awards tend to remain at the level of the achievement in a college. But this award is at the level for those whose make a debut as artists, so the point is to confirm their talents, physical/mental strength, and the quality of their works. This point was well reflected in the final results of the exhibition and each production. Their rivals are the world. This award was the first attempt, but if it continues, the selected students will demonstrate other students by their actions "if we work that way, we can perform as professional artists." I hope their future is successful.



長谷川祐子  
Yuko Hasegawa

まず、(個人の)プロダクションとしてしっかりとできていますね。出来の問題や、素材の選び方、プロセスの特殊性にウルトラファクトリーと関わったということが現れている印象がありました。彼らはこの展覧会、このプロジェクトの契機としてさまざまな自分のオルタナティブな可能性を発掘できたのではないかと思います。特に小宮さんなんかは、あらかじめこのサイトでつくるということが非常に明確だったと思うんですけども。この限られた場所でのどのような形で住み分けるといことも含めて、最終的にプロジェクトの形にしなければならない。そういう意味では全体のバランスは取れていたのではないのでしょうか。

First of all, their works are neatly completed as individual productions. The quality of works, the selection of materials, and the unique process gave me the impression that they worked with ULTRA FACTORY. I think this exhibition gave them an opportunity to explore their alternative possibilities. Especially, Komiya had a distinct idea to install his work in that location from the beginning, but he had to realize the project that coexist with the other's work in the limited space. In that sense, the whole exhibition was well balanced.



名和晃平  
Kohei Nawa

学生の展覧会にみえない、というのが良かったと思っています。先生やファクトリーのスタッフが手取り足取り、というだけではなく、自分たちで考えて、自分たちで作品を語って作り上げていった。彼らの世代のリアリティがしっかりと表現されていることがよかったですね。ヤノベさんも僕もハラハラしっぱなしで、最後の1〜2ヶ月は本気で悩んで二人で話し合ったり……。諫山に関しては、着実に4年間続けて一貫してクオリティを上げ続け、作家としてのスピリッツ・基準を自分で保ってきた、乗り越えてきたところを最終的に評価されたんだと思います。小宮も、今までにない大胆なコンセプト。最後の追い込みでひねり出した瞬発力、勇気も評価したいです。

It was good that the exhibition did not seem a "student's" exhibition. Teachers and the factory staffs did not spoon-feed their students, but the students worked out, made presentations, and created their works by themselves. The reality of their own generation was well represented in their works. Yanobe and I actually felt nervous, and, in the last 1-2 months, we got rattled seriously and tossed around their works. Isayama has continued to improve his work steadily throughout 4 years. He has kept an artist's spirit, and broken though his previous limits. That is why Isayama's work was highly regarded in the end. Komiya's work also has a daring novel concept. When it was down to the wire, he used his explosive power and guts to complete the work, which I highly evaluate.



椿昇  
Noboru Tsubaki

このアワード最大の特徴は、制作支援チームがスタート時点からアートアスリートをバックアップしたことにあります。アーティストが孤独に作業するという美学にこだわる人もいますが、それは高校野球の選手に「純粹」という誤った美学を押しつけるに等しい行為で文化とは呼べないファシズムに近いものです。また、制作過程にもトップアーティストたちが思想的な相談に乗り、背骨が一段と強化されたと思います。若いアーティストが思想的な背骨を強化する過程の多くは、読書や思索のなかではなく、つくりながら経験的に学ぶことが多いのです。思想は物質と対話しながら相補的に強化されていくからです。ヘビーな演習作業や技官とのやりとりがある中で、最終的にクオリティとは何かを体感したこと、それがこのアワードと他との大きな違いではないのでしょうか。

The most distinctive character of this award was that the supportive team assisted art athletes from the start. Some stick to the aesthetic of an artist's working in loneliness, but it is next to the behavior to impose the wrong aesthetic on high school baseball players to be "pure". It is not called a culture but rather fascism. Meanwhile, in this competition, the nominated students had consultations with top artists to strengthen their conceptual backbones. Young artists often improve their conceptual abilities neither by reading nor thinking, but through the experiences at the scene of production. An artist's thought is complementary with the creation of works, and it is refined when dealing with materials. What is the most different of this award from others is that, in the hard creative exercises and the communication with technicians, the selected artists could realize what quality is.



ヤノベケンジ  
Kenji Yanobe

割と特殊な展覧会、コンペの作り方だったのですが、最終的に展覧会構成としても、すごくまとまりのあるものになって、かなりのクオリティに仕上げられたというのが、自分たちで企画してながらも思った、正直な感想です。小宮が土壇場でこの場所が持つ潜在的な能力を引っ張り出してきたというのは、今回一番特筆すべきところ。アートゾーンっていう空間を見事に使った、ある種、運命的必然性をもった展示構成に傑出しています。審査会で椿さんが「この1階の2作品をもって何か賞を与えたいって思った」といったのも、モノだけではなくその周りがある空間とか世界観をきちんと見ながらの構成になったな、ということだと思います。

It was a particular kind of competition and exhibition, but we could establish the well-organized exhibition in a high-quality finished form. I am one of the planners of this award, but this is my honest impression. It was the most notable that Koyama brought out the potential of the site with his work at the last moment. He used the space of ARTZONE tactfully. It was a sort of inevitable conclusion and its display configuration was outstanding. Mr. Tsubaki said "I want to give a prize to the two works on the ground floor as one." It means they did not show only the art pieces themselves but the exhibition space was constructed considering the space or the world around them.



トークセッション「若き才能との出会い／育成」  
Talk Session "Meeting and Cultivating Young Talents"



「ULTRA AWARD 2010」公開審査会  
"ULTRA AWARD 2010" Open Review



「ULTRA AWARD 2010」個別審査会  
"ULTRA AWARD 2010" Individual Review



ULTRA AWARD 2010 DOCUMENT  
by ULTRA FACTORY PRESS + art project room ARTZONE

#### 「ULTRA AWARD 2010 EXHIBITION」

会期：2010年10月23日(土)–11月7日(日)[会期中無休/入場無料]  
会場：art project room ARTZONE  
[京都市中京区河原町三条下る一筋目東入大黒町44 VOXビル1・2F]  
開館時間：平日13:00–20:00/土日祝12:30–20:00(最終日のみ17:00まで)  
出展作家：諫山元貴/小宮太郎/寒川裕人/ときカケ/橋本優香子  
協力：株式会社 中川ケミカル

—

#### ULTRA AWARD 2010 関連プログラム

トークセッション「若き才能との出会い／育成」  
日時：2010年10月14日(火) 18:00–20:00  
会場：京都造形芸術大学・ウルトラファクトリー  
定員：50名(先着順/申込不要)  
出演者：小山登美夫 (Tomio Koyama Gallery)/木ノ下智恵子 (大阪大学コミュニケーションデザインセンター特任准教授)

#### 「ULTRA AWARD 2010」公開審査会

日時：2010年10月24日(日) 17:00–  
会場：art project room ARTZONE  
審査員：浅田彰(批評家)/樫昇(現代美術家)/名和晃平(彫刻家)/後藤繁雄(編集者・クリエイティブディレクター)/ヤノベケンジ(美術作家・ウルトラファクトリーディレクター)

#### 「ULTRA AWARD 2010」個別審査会

日時：2010年11月2日(火) 13:00–15:00  
会場：art project room ARTZONE  
審査員：長谷川祐子(東京都現代美術館チーフキュレーター)

—

#### ULTRA AWARD 2010 DOCUMENT by ULTRA FACTORY PRESS + art project room ARTZONE

ULTRA AWARD 2010を記録・発信するプロジェクトを実施(2010年7月–12月)  
ディレクター：多田智美(MUESUM)/山下里加(ASP学科准教授)  
サポート：松永大地(Gallery RAKU)  
メンバー：岡田映里(ASP学科ASPコース3年生)/辻諒平(ASP学科クリエイティブライティングコース2年生)/織田真菜(美術工芸学科洋画コース1年生)/李ハヌル/河原功也/都司菜々美/小林稜治(以上、ASP学科ASPコース1年生)

#### "ULTRA AWARD 2010 EXHIBITION"

Period: Sat. 23 Oct. 2010–Sun. 7 Nov. [Open daily / Entrance Free]  
Venue: art project room ARTZONE  
[1-2F VOX Bldg., 44 Daikoku-cho Kawaramachi, Sanjo Sagaru Hitosujime Higashi Hairu, Nakagyo-ku, Kyoto]  
Opening hours: 13:00–20:00 [Weekday] / 12:30–20:00 [Sat. Sun. and Holidays] (until 17:00 on the last day)  
The Artists: Genki Isayama / Taro Komiya / Eugene Kangawa / toki kake / Yukako Hashimoto  
Supported by Nakagawa Chemical, Inc.

—

#### ULTRA AWARD 2010 associated program

#### Talk Session "Meeting and Cultivating Young Talents"

Date: Tue. 14 Oct. 2010, 18:00–20:00  
Venue: ULTRA FACTORY in Kyoto University of Art and Design  
Capacity: 50 seats (First-come basis/No appointment necessary)  
Panelists: Tomio Koyama (Tomio Koyama Gallery) / Chieko Kinoshita (Adjunct associate professor of the Osaka University Center for the Study of Communication-Design)

#### "ULTRA AWARD 2010" Open Review

Date: Sun. 24 Oct. 2010, 17:00–  
Venue: art project room ARTZONE  
The Jury: Akira Asada (Critic) / Noboru Tsubaki (Artist) / Kohei Nawa (Artist) / Shigeo Goto (Editor, Creative Director) / Kenji Yanobe (Artist, Director of ULTRA FACTORY)

#### "ULTRA AWARD 2010" Individual Review

Date: Tue. 2 Nov. 2010, 13:00–15:00  
Venue: art project room ARTZONE  
The Jury: Yuko Hasegawa (Chief curator of Museum of Contemporary Art Tokyo)

—

#### ULTRA AWARD 2010 DOCUMENT by ULTRA FACTORY PRESS + art project room ARTZONE

A Project Documenting and Transmitting ULTRA AWARD 2010 (Jul.-Dec. 2010)  
Director: Tomomi Tada (MUESUM) / Rika Yamashita (Associate professor of ASP course)  
Support: Daichi Matsunaga (Gallery RAKU)  
Project members: Eri Okada (3rd year ASP) / Ryohei Tsuji (2nd year Creative Writing) / Mana Oda (1st year Painting) / Lee Haneul, Koya Kawahara, Nanami Gunji, Ryoji Kobayashi (1st year ASP)

